

【花子の模索時代（山梨英和教師時代）…自分のなすべきことは何か…】

☆「今となればこんなになつかしい甲府時代であるけれども、その当時は実をいうと、寂しくてたまらなかつた。読むこと、書くことよりほかに楽しみのない生活、そうして縁結びが使命でもあるかのよう
に、こんな人はいかかが？あんな人はどう？縁談ばかり持ってくる中年婦人たちの、結婚という人生の
大きな事実に対する安易な見方に極度の反感をいだいて、とうとう私は結婚嫌悪症にかかってしまった
…」(「続・静かなる青春」随筆集『想像の翼に乗って』)

☆「どっちを向いても山ばかり、山を愛する私でありながら、その山々があまりにも重苦しく感じられる時もある。
「息苦しい、息苦しい」と叫びだしたくなるような不自由さが時々私を圧迫した。(中略)周囲の人々と違ったことを
考えている者の歩みは寂しい。私は若い時のことを思い返すと、いつも満たされない孤独感のみが心に返って
くる。しかし、この寂しい時代があったればこそ広く読書もし、深く思索することもできた。」(「続・静かなる青春」随筆
集『想像の翼に乗って』)

☆「自分から胃を脱ぐまでは敗北者ではないと自ら堅く心に決して、不安も寂寥も「笑の盾」蔽ふて行
こうと思った。人は私を幸福の子といふ苦のない娘と羨む。私は唯ほほえんで居た。「ほほえみの楯」の
蔭になった私の心には不安があり、うらみがあり、怒りがあったけれど。」(「歌を詠んだいろいろの時」
『婦人新報』大正6年(1917)10月)

☆「その昔、私はある山国の小都会で「東京の学校を卒業してきた若い女教師」だったことがある。そ
の山国はことに秋の風景が美しかった。空が青く澄んで、葡萄はむらさき色に熟し、溪流は白く流れた。
その国の星空の下に立って深く思いを凝らした自分であった。大空に輝く星をじっと見上げながら、何
か天の一角から自分に向かって語り聴かされることがあってもいいはずだと、幾たびか思った。昔の聖
者たちが特殊の使命を身に感じ、特に自分に呼びかける声を聴いて起ったように、自分にも何かの声
がきこえそうに思われたほど、夜の夜空は私を神秘感で包んだ。」(「空を仰ぐ」随筆集『曲がり角のその先
に』)

【御殿場・二の岡の夏の勉強会】

☆「何ものか我に潜める貴さに思い至りし夜半の星影 御殿場での或る夜半、私はフッと眠りから醒
めた。窓越しに見える深夜の富士は薄黒く空に聳えている。星が一つ際立ってキラキラと輝く。自分の
過去、未来、現在と、言ったようなものが一瞬の間にスッと頭をかすめて通る。私は悟った—自分の生
涯が、自分の生命が、決して徒らに在るものでなく、また徒らに去ってゆくものでもないことを。此の
肉の體に生命を與へて居る魂、それ以上にもう一つ神に通じる何かが一すなわち靈と言おうか—自分の
内に潜んでいるのを思うた時、私は嬉しかった。有難く感じ、また自分がと貴まれた。星はしきりに光
を投げて、めざめた私の霊を祝って居る。」(「歌を詠んだいろいろの時」『婦人新報』大正6年(1917)
10月)

☆「二の岡ですごした二夏は私の後年の生活をおる程度決定したともいえる。(中略) 私は日本のティーン・エイジャーの読むものについて非常な不満を持っていた。それは若い人たちがわるいのではなく、適当なものがないのだ。(中略) 英米の青春読みものの三十年、四十年と年月を経てなおかつ読まれ読まれているものを、たくさんに夏休みのあいだに読めば読むほど、日本の出版界の盲点ともいうべきものを深く感じた。自分はどうかしてこれらの書物を日本の若い人たちに与えたいと、そもそもそういう決心をしたのはあの二の岡の森の中であった。」(「夏のおもいで」随筆集『曲がり角のその先に』)

☆「…案内の強力も交せて同勢 27 人の富士登山の写真である。「富士八合目にて」と記してある。ひと夏、御殿場在二の岡の寮舎に東京の暑熱を避けて行ったときに登ったもので、もちろん、まだ娘時代のことである。初めのうちは、意外に楽な登山道にすっかり元気づいてむやみに急いだのがたたって、八合目までたどりついた時分の私は見るも哀れな姿であった。(中略) そんなわけで、八合目からは私が登ったのか、強力が登ったのか、そこところはすこぶるあいまいで、つまり、前とうしろから強力が引っ張るのと押すのとの力が大部分で、私は富士山の頂上へ文字通り押し上げられ、引き上げられたのであった。写真はその大がかりの八号目から登山を始める前、「八合目早朝」に撮ったものだと書いてある。若い心にしみじみと人生行路の多難ということを感じたのは、この富士登山の道すがらであったのを今でも忘れない。」(「二十一世紀」随筆集『をみななれば』)

☆「何年頃のことだろうか、私が結婚生活に入ったのは大正 8 年 (1919) だから、それより以前のことである。私は市川女史とはじめて御殿場二の岡の故広岡浅子夫人の別荘で会ったのである。「小学校の先生」として私に紹介されたのであった。そのころアメリカへゆく計画を立てていられたのではなかったかしら? 何だかそんなような印象が私の記憶の中に残っている。二の岡で別れてから何年後のことだったのだろうか、もうそれからあとの記憶はぼんやりしてしまって、再びに会女史に会った時は、こちらは平凡な一家婦、あちらは苦難の多い婦人参政権獲得運動の闘士であった。」(「私たちのあゆみ～市川房枝さんに捧げる随筆集『雨の中の微笑』)

【広岡浅子から後進の女性たちへ】

☆女性が教育を要求したり、政治的な活動が行える権利を獲得することも必要ですが、ただ権利を振るいたいだけならば、それは無益な徒労にすぎません。女性がそういった権利を獲得するのであれば、その権利は全人類の幸福を増すために発揮し、平和な世の中を作るための手段として行使すべきです。

(広岡浅子『婦人週報』より)

☆「小我を捨て大我を得るようには至らなければなりません。我を忘れて国を憂うとか、君を思うとかいうのが即ち大我であります。人がどう云ったの、こう云ったの、むねに金鎖をさげたの、指にダイヤをはめたのと、そんなつまらんことばかりを云っているようではいけません。小我を断絶してそうしてその上に築き上げた大なる我でなければ、真の人間の値打ちは無いと考えます。」(広岡浅子『婦女新聞』より)

☆「自分が身につけた学問で、自分ひとりが偉くなるのではなく、日本女性全体の地位を上げることを考えてほしい。小我にこだわらず、もっと大きな世界の中で自分のなすべきことは何か。真我をというものをみつけてほしいと思います。」(村岡恵理著『アンのゆりかご～村岡花子の生涯』より)

<村岡花子の生涯>

- 1893(明治 26)年(0 歳) 安中逸平、てつの長女として 6 月 21 日、山梨県甲府市に生まれる。
- 1895(明治 28)年(2 歳) キリスト教プロテスタントの甲府メソジスト教会で幼児洗礼を受ける。
- 1898(明治 31)年(5 歳) 家族で東京・品川に転居。
- 1903(明治 36)年(10 歳) カナダ系ミッション・スクール東洋英和女学校予科に編入学。10 年間の寄宿舎生活で、カナダ人婦人宣教師たちからキリスト教に基づく人格教育と徹底した英語教育を受ける。
- 1909(明治 42)年(16 歳) 柳原燐子(後の白蓮)の紹介で佐佐木信綱門下(竹柏園)に入門。短歌や日本の古典文学を学ぶ。信綱の紹介で、歌人でアイルランド文学翻訳家の片山廣子に出会い、近代文学の指導を受ける。
- 1910(明治 43)年(17 歳) 東洋英和女学校本科卒業(高等科へ進む)。日本基督教婦人矯風会を通じ、公娼制度などの婦人問題、貧しい子供たちを取り巻く社会問題に触れる。会報『婦人新報』に寄稿、編集も任される。(昭和 10 年まで)
- 1913(大正 2)年(20 歳) 東洋英和高等科を卒業。歌の仲間と歌集『さくら貝』を自費出版。
- 1914(大正 3)年(21 歳) 山梨年英和女学校に英語教師として赴任。
- 1915(大正 6)年(24 歳) 実業家・広岡浅子主催、御殿場二の岡の夏の勉強会(前年も参加)で大人も子供も楽しめる家庭文学の道を志す。翻訳短編集『爐辺』を出版。
- 1918(大正 8)年(26 歳) 東京の基督教興文協会(後に教文館)に婦人や子ども向けの書籍の編集者として勤める。福音印刷会社を経営する村岡徹三と結婚。
- 1919(大正 9)年(27 歳) 長男・道雄誕生。
- 1923(大正 12)年(30 歳) 関東大震災で夫の会社が倒壊、多額の負債を抱える。花子のペンが家計を支える手段となる。やがて自宅大森で夫と共に出版兼印刷会社、青蘭社を設立。雑誌『家庭』創刊、清新な家庭文学を提唱。
- 1926(大正 15)年(33 歳) 長男・道雄を疫痢で失う。
- 1927(昭和 2)年(34 歳) 片山廣子の勧めでマーク・トウェインの『王子と乞食』翻訳出版。子供たちのために上質の家庭文学を紹介していくことを改めて決意。
- 1930(昭和 5)年(37 歳) 女性文学者の友人らと婦人参政権獲得運動に参加。
- 1932(昭和 7)年(39 歳) JOAK(現 NHK)のラジオ番組「子供の新聞」の「ラジオのおばさん」として親しまれる。長女みどり誕生。
- 1939(昭和 14)年(46 歳) 世界情勢の悪化で帰国する教文館同僚のカナダ人宣教師ミス・L.L. ショーから *Anne of Green Gables* を友情の証として手渡される。
- 1941(昭和 16)年(48 歳) 太平洋戦争開戦 ラジオ番組「子供の新聞」辞任。
- 1945(昭和 20)年(52 歳) 第二次世界大戦終結。 *Anne of Green Gables* の訳了。
- 1946(昭和 21)年(53 歳) 文部省嘱託となり教育の機会均等、教育改革に尽力する。婦人問題、教育問題の評論家としても活動。
- 1952(昭和 27)年(59 歳) 5 月 10 日三笠書房より『赤毛のアン』出版。以後、7 年間でアン・シリーズ 10 冊を翻訳出版する。自宅に家庭文庫「道雄文庫ライブラリー」を開設。
- 1953(昭和 30)年(62 歳) 日本児童文芸家協会理事に就任。ヘレン・ケラー来日時に講演通訳。

- 1956(昭和 32)年(64 歳) 家庭文庫研究会会長、日本翻訳家協会副会長に就任。
1960(昭和 35)年(67 歳) 児童文学への貢献で藍綬褒章を受章。
1963(昭和 38)年(70 歳) 夫・徹三死去。
1967(昭和 42)年(74 歳) 娘のみどり一家を訪ね渡米。初めての海外旅行。
1968(昭和 43)年(75 歳) 10 月 25 日死去。

主な著作

随筆集：『腹心の友たちへ』『曲がり角のその先に』『想像の翼にのって』など。
童話集：『紅い薔薇』『お山の雪』『たんぼぼの目』『桃色のたまご』など。

主な翻訳作品

L.M.モンゴメリ作『赤毛のアン』シリーズ全十巻、『可愛いエミリー』『エミリーはのぼる』『エミリーの求めるもの』、『果樹園のセレナーデ』、『丘の家のジェーン』、『パットお嬢さん』、チャールズ・デイケンズ作『クリスマス・キャロル』、マーク・トウェイン作『ハックリベリー・フィンの冒険』ウィーダ『フランダースの犬』(以上新潮文庫)、『王子と乞食』(岩波文庫)、エレナ・ポーター作『少女パレアナ』『パレアナの青春』(以上角川文庫)、『スウ姉さん』『そばかすの少年』『リンバロストの乙女』『べにはこべ』(以上河出書房文庫)、など多数。
絵本：『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』『ごきげんならいおん』『アンディとらいおん』(以上福音館書店)、『ブレーメンのおんがくたい』(偕成社) など。